

周南市文化芸術振興プラン策定委員会（第1回）会議録

1. 日時	令和6年7月24日（水）14時00分～16時00分
2. 場所	周南市役所2階 共用会議室H
3. 出席者	委員：大橋委員、尾上委員、門井委員、小林委員、 高菅委員、西崎委員、原田委員、山本委員、 笹川委員（松本委員代理） 事務局：文化スポーツ観光部 河津部長 文化振興課 川上課長、花野課長補佐、山本係長 傍聴者：なし
4. 議事	周南市文化芸術振興プラン策定について
5. その他	周南市の文化振興について

1. 開会

あいさつ

2. 協議事項

（1）委員・事務局自己紹介

（2）会長・副会長選出

（3）議事

ア 周南市文化芸術振興プラン策定委員会について

（事務局）

別添資料1「周南市文化芸術振興プラン策定委員会について」を基に、本策定委員会について説明。

（会長）

事務局からの説明に対して、何かご不明な点や質問があれば挙手をお願いします。

（委員）

（質問なし）

イ 周南市の文化芸術の取組に関する現状について

(事務局)

別添資料 3 ～ 10、アンケート結果を基に、周南市の文化芸術の取組に関する現状について説明。

(会長)

事務局からの説明に対し、何かご不明な点や質問があればお願いします。

(委員)

(質問なし)

ウ 周南市の文化振興について（意見交換）

(会長)

本日メインの周南市の文化振興について、先日から今日にいたるまでご意見を頂きました。ありがとうございます。本日第1回目の委員会ですが、事前にお聞きしました論点二つを意見書という形で資料11としてまとめられております。意見書を読むための資料も併せてご覧ください。第1回目なので自由にご発言いただけたらと思います。発言は自由に意見をお願いしたいが、時間に限りがあるため、論点が二つなので、偏りがあれば二つ目に移らしていただくかもしれません。

なおかつ今、市民意識調査も上がってきましたので、そちらも活用していただきながら自由に発言していただきたいと思います。

まずは論点1の「文化芸術による周南市」を創るために必要と思われる取組からスタートしたいと思います。

(委員)

文化芸術による周南市を創るとしたときに、アンケートをみても、学校でやればよいという意見もあるが、誰もが主体にならないといけないと思う。かといって大人が急にそういう傾向になるかといえ、そうならないだろうと思っている。そういう意味では、子どもたちが文化芸術に触れる機会を増やしてあげることが、確実であり一番早い方法であると思う。そういう意味で、市民という言葉にこだわった書き方をしたが、子どもの環境・取り組みが大事なんだという事をしっかり主張するプランであってほしい。

(会長)

小中学生に対する取り組みについてが、私が書かせてもらっている意見であるが、本学と高専の生徒だけでは周南市の若者を受け入れることはできない。必ず流出してしまう。そして帰ってこないとなるとどうしようもなく、いつなら周南市の文化芸術に触れることができるかという、小・中・高が一番いい時期であると思っている。そこで何ができるかは大きな論点の一つとなるのかなと思います、書かせていただいた。

(委員)

本来、国や県が整備する中で、それに対応して市がまた取り組んでいかれる。大元としては市がどのようなビジョンを持つか、大元としてあって、それをもとに、行政の役割、実践する人の役割、文化施設の役割、経済界と文化がどのように連携できるか、そういう事の整理をする中で、お互いの関係づくりと連携、情報の共有、共通理解、共通認識、共に自然に出来る体制が大事。今はそれぞれの分野で頑張っているが、横のつながりというか、連携が非常に難しい。関係づくりは人と人のつながりになってくるので、みなさんがそれぞれの分野で一生懸命だからゆとりのないことが一つある。それと意識の問題で、意識をそういう風に向けていくかという。

内閣府の調査でも何をやっても、7～8割は文化に親しんでない。2～3割しか関わっていない。影響力は文化は意外にない。いろいろな分野でもマイナーな世界。書道、写真、絵画も。小さい時からの体験であったり、そのことを自らの五感で感じていく、経験として知っていくことがとても大事。

文化会館を造ったときに、何を感じたかという、最初は芸術、文化を招へいたとしても、習慣化できていないので、広まっていけない。そこで、地域に出かける、学校に出かける、移動音楽教室をしたり、地域児童劇場をしたり、40年来ずっとやってきているが、なかなか広がっていない。それを受けた方は素晴らしいと感じるが、有料化して一般の劇場でやったときは、お金がかかるから、お金を出す価値観を持ち得ているか、そこに大きな壁がある。周南市は県内でも恵まれている環境にあるが、それでも、どうしたら普及していくか、具体的に推進できるか、そのためにお互いに支援できるかという、体制作りをしていく

か、組織的な取り組みが大きな課題である。全国的にもできていない。それほど難しい。

今回のプランを作られるという事で大賛成です。ようやく周南市の中で市長を始め、意識が高く、そこに向かってやっていこうということで、いろいろな分野で感じていることを持ち寄って新しい組織図が出来ていく。それに則って実践を動かしていく。そして結果がついてくる。こういう場があることが有難いし、皆さんがそれぞれ持ち得てきてる経験を活かして、より実践的になっていくといいなと思います。

(会長)

周南市の文化芸術が恵まれていると言っておられたが、特にどういうところがという自負がありますか。

(委員)

まず、小学校区単位に市民センターがあるということ。コミュニティ組織が小学校単位で芽生えて、作られているということ。実践活動も色々な分野の活動で顕著です。文化会館の前は、昭和31年にできた市民館があり、大きな役割を果たしてきていた。文化会館ができて、市民館を残していきながら、市民館の利用率が30%~40%。文化会館の利用率が50%を超えていた。1000人以上のホールを二つも持っている自治体は県内にはなかった。山口市も宇部市も一つしかもっていなかった。周南は、市民館が1060人、文化会館が1800人、なおかつ高い利用率が維持できている。これは普段の実践活動が顕著であるという事です。鑑賞する人が他市に比べて多いという事です。これは比較ではないですが、比較できる人がいない。文化会館ができて、美術博物館ができて、この街には文化がないという人がいるが、根拠が何もない。自分が文化に関わりがないから、極めて個人的な感想を述べているだけ。それは正しくない。正しい情報を伝えながら、そういう人に対しては正しく認識してもらう。情報の出し方も、この課でも、特集を組んだり、文化振興の立場で、より具体的な事を取り上げていただくと、実際に関わっていない人の目にも多少は触れるのかなという気がする。関わっていない人にとっては理解するのは非常に難しい。人は体験して初めて理解できる。まど・みちおの詩や絵画も、ほとんどの人がまど・みちお

ってどんな人と言われるが、市内の幼稚園では音楽会を30回以上やっているから、それについては普及できていて、子ども達や若い人は知り得ている。それは取り組みをずっとやってきている成果です。

(会長)

周南地域のポテンシャルが高い。文化会館の使用料は実利的な話で文化会館の使用料を下げるかどうか。友人が群馬県高崎市の芸術劇場で職員をやっている。いい施設がリーズナブルに使えと引き合いが高いそうです。文化振興につながるかは実利的なところと合わさってくるのかなと思う。いかに興味を持っていない人に持たせるか、アンケートでも顕著でした。ひとつの課題になってくるのかなと思う。

いろんな方の意見を聞きたいので、高菅委員のイエンナーレとビエンナーレについてご意見をお願いします。

(委員)

関西にいた関係で、京都のイベント、イエンナーレとビエンナーレを挙げたのですが、京都グラフィという写真展を、京都市内の各地のギャラリーを借りてされていて、自分もスタッフとして関わっていると、いろんなガイドの市外、府外の人と話す機会があり、自身も体験して初めて理解できる、実体験を持って文化芸術に愛着が沸いたという経験があり、イベントの名前を挙げさせてもらった。県内でも宇部ビエンナーレがあり、周南市でも何かできないかと、意見をのべさせていただきました。

(会長)

周南市でもいろいろな取り組みがされていて、私も群馬県中野町のビエンナーレに行ったことがあり、身近に文化芸術に迎合させるという点で、街中に美術・芸術品を配置する取り組みは、全国的にも広がりがあります。多彩な事例提供をしていただけると、知らないことが多くあるので助かります。

(委員)

スポーツの分野におり、文化芸術に興味がないわけではないが、縁がなかった。興味がない人間にそれを押し付けても全く意味がない気がする。かと言いつつも文化に興味がある人がいらっしゃったら、気軽に触れられるようなイベント

や行事があればいいなと思っている。

以前、回天のレプリカを港に設置するとき、企業に寄付金を募集したことがあった。その時も寄付金は目標に対して十分に集まったと思うが、文化、芸術、スポーツに支援してもらえる企業があるこの市は恵まれていると言える。経済界としては連携できる余力があると金銭的な面も含めて、個人的には思っている。

(会長)

こういったものに日本だとお金を出してくれないことが多い中で、本学も寄付金を受けている。支援が受けられる体制を作れば、文化振興に関して資金面でクリアできれば、先ほどご提案のビエンナーレも展開していくことができるのではないかな。

(委員)

小中学生からの機会を持つということに関しては、自身の体験から部活動から楽器に触れるという体験を得て、それが続いている方が多いのかなと思います。部活が地域移行されると聞いて、それがどうなっていくのかなと関心があります。お金がかかるので、各家庭の経済状況も影響するのかなと。小さいころからの体験が自身の関心につながるというのは、自分の体験を持って感じている所です。周南市は文化会館や美術博物館があり、身近に足を運べる環境にあるが、市民のみなさんは、身近にありすぎて有難いと気づいていない。周南市は充実した施設があるのだと発信していくことが大事。

旧新南陽市の出身だが、仕事を始めて、大津島には十年前に行ったのが初めて。旧徳山市の人は小学校のころから記念館へ行ったりすることができている。児玉源太郎の事も知らなかったが、合併して子供が資料をもらってきて発見できた。周南市には触れる機会、良い環境があるので、PRしたら良い。

(委員)

興味がない人、興味があるが情報が届いてない、機会がない人が多いのではないかな。自分に関係があるものとしてみていただくのが難しい。良い方法がないのかと話しているが、一つの館だけでは広がっていかないので、いろいろな分野の方たちに話が聞けるのは、有難い機会だと思います。ある展覧会への親御さんか

らの電話で、お子さんはその作家が好きで、講演を聞きたいのだけれど、自分は興味がない。どうしたら良いか。という内容。子どもはアクセスしたいが、学校が連れて行ってくれれば、アクセスできる。どうやったら来ていただけるのかと思っている。

(会長)

子どもは未成年？

(委員)

そうです。小学生とか中学生とか。高校生になれば、自分で行動でき、行動範囲が広がるので友達同士で来てくれたりするが、小学生、中学生となると一人では難しい。触れる機会があるといいなと思う。

(会長)

小中学生の文化会館の利用数が一定数いるのは、部活動の吹奏楽でしょう。吹奏楽部にいると必ず行くので、かなり身近です。そういった経験が後の人生にも影響すると実感する。

(委員)

話を聞いていて思ったのは、大事なことは支援と連携と発信なのかなと。私たちは映画祭の実行委員会を周南市で立ち上げて15年になるが、ほんとにヒーヒー言いながらやっていて、行政からも途中までは支援をいただいていたが、いろんな規約で支援できないということになって、全て民間の寄付と協賛金とチケットの売り上げでのみで、全員ボランティアのみでやってきましたが、なかなか難しく、第11回の時には文化庁からコロナということで、補助金をいただきましたが、それ以降はなかなかないということで、百円の恋という映画の撮影の誘致はできたが、誘致にお金を集めたいとか、ロケをするのにエキストラを集めたいとか、私たちのやり方が下手くそだったのでしょうか、なかなか支援が集まらない。協力する人が、呼びかけても響かないという中でなんとかやってきたんですけど、各団体が高齢化していることもあるのか、自分たちのやることに一生懸命で、なかなかこの地域の連携が難しい。それは、一つに支援という事があるのかなと思いました。これは百円の恋がアカデミー賞を五つ取っても、皆さん知ってくれない。今年中国でリメイクされて興行収入740億円8000万人が観た。

それを僕たちが、百円の恋というシナリオを選ばなければ、中国で740億円という市場は発生しなかったが、そういうすごさを誰に訴えても、ふんといしか言ってくれない状況を変えていくには、支援と連携と発信という、各文化芸術に携わる人たちが、スクラムを組んで、お互いに情報交換をしながら、連携をしていく仕組み、例えばそれが広報誌なのか、ネットでお互い情報共有するのか、今後の事だとは思いますが、行政がきちんとした計画プランを作成して、そのもとで各団体が団結をしながら、適正な支援を受けながら、適正な情報発信をしていく仕組みを作っていくということが、一番大事なことはないかと思います。最後に小中学生の件で言うと、私は今、下松市の末武中学生の生徒と映画をつくっていて、部員が50人おります。半分がそれぞれの部活をやっていて、半分が何の部活もやっていない子ども達なんですけど、部員が増えていて、毎日のように新入部員が来ている。この取り組みがモデルになって、美祢市の教育委員会から頼まれて、同じような取り組みをして、秋に指導に行く。現場の中学生はとても意欲的で、今の子どもたちは、アニメーションが大好きなので、声優になりたいとか、絵を描きたいとかいう子どもたちがたくさんいる。そういう子たちに少し刺激を与えてあげて活躍する場を与えると、ものすごい向かってくるというか、アイデアの塊というか、僕は交通整理をするだけで、ちょっとした技術のアドバイスをするだけで、子ども達に自由にやらせている。それで、去年全国一位になるような映画ができたんですが、そういう子どもたちの可能性を広げていくのは、文化芸術分野しかない日々実感している。

(委員)

原田先生がおっしゃっていたが、ほんとにそうだと思う。一気に何かを変えるのは難しい。時間がかかると言いながら、小中高なら5年10年で変わってくる可能性もあるかなと思う。そこは力を入れた方がいいなと。新南陽の総合支所が地域の小学4年生を集めて、伝統芸能の話をするという授業をつくってくれて、東小学校と西小学校の生徒が120人来て、文化財の話を市の職員の人話して、そのあと15分くらい本山神事の事を話した。最初は小学校4年生がどれくらいの食いつきかと思っていたが、先生方がよく言ってくれていたのもありましたが、すごくよく聞いてくれて、感想文もたくさんもらいました。親御さんや地

域の一般の方も入っていいよということで、入られて、自分たちも子どもの時に聞くチャンスがあれば良かったよなという事を生で聞くと、まさに今活動しているのは高齢の方で、そこもちろんとしなくてはいけないが、周南市の今からの活動という面では、それだけでは足りない。今日も何人かの方が、小中高に対して発信していかなければいけないとおっしゃったので、嬉しく思います。

(会長)

1. 文化芸術を創るためにどのようなことが必要かというご意見を拝聴した中で、キーワードとしては若い世代の支援作り、機会の創出が必要なのかなと、その中で経済界のバックアップができるよ、意欲の高い高校生がいるんだよ、ポテンシャルの高い子がいるんだよ、適切な支援をすれば、活かせるんだよというご意見があった中で、学校の置かれている立場に期待が高まる一方で、いかにして小学生、中学生に教えていくかという難しさがあればお願いします。

(委員)

基本的に学校にプラスアルファで何かをするのは無理です。学校は飽和状態なので、これ以上何かを学校で取り組んで欲しいと提案されても学校は対応できない。そこは考えていただきたい。部活の地域移行の話が関連してくるが、学校乖離なわけです。学校が一切関わりませんとなったときに、子ども達がそういう活動に関わらなくなるんじゃないかという懸念がある。それは、そういう場がなければ、子ども達が関わらないというのは当たり前のことだからです。その一方で資料9裏面に本計画で対象とする文化芸術の範囲が文化芸術基本法で示されているが、今現在ここにあるいろいろなものの中で、学校の部活動でやっているものがこの中にあるかということ、数えるほどしかない。逆にいうと部活動がなくなれば、これらのこうした活動に中学生だけでなく、小学生も関われる団体が創出されれば、可能性はあるということ。それは中学校の部活動の移行を忌憚としたう文化芸術活動を子どもたちに浸透していくきっかけになるのではないかと考えている。そういう意味では部活動改革が基本プランの中に占める位置というのは非常に大きい、意味のあることではないかと思う。学校では無理です。

(委員)

指導者や受け皿、そこに誰がいるかが一番大事。結局、レベルの高い指導者が

いれば、人が集まってくるし、受け皿としてやりやすい。盛んなクラブがあれば、スポーツにおいても、文化においてもやりやすい。僕が下松でやっているのも、たまたまPTA会長をやっていた中学校の校長先生が子供たちの文化活動の地域移行を考えて、下松市は映画産業が盛んなので、それを中心にやっていって、子どもに映画を教えられるのだったら、そういうことをやって、ゆくゆくは移行して、うちの部活でやってみたらどうかと、文部科学省が部活の指導員という制度ができたから、それでやってと頼まれたからやり始めた。やはり、人を活かすというか、周南市の中で文化芸術活動の団体とか人を活かしながら、そういうところに子どもたちを集合させていく発想でしかできない。学校がプラスで先生たちが何かするのは不可能。教育現場にいて、これ以上のことは勘弁してくださいというのは先生がおっしゃる通りなので、それでは、どう体制をつくるか、一番大事なんだろうなと思いました。

(会長)

みなさんご経験があると思うので。

(委員)

文化協会の立場で言えば、私が文化協会の会長に就任したのは今から9年前の65歳の時、そのときも70歳代が中心で若いと言われた、今は80歳代。毎年100人から200人が退会している。詩吟連盟は連盟自体がない。能楽連盟も文化協会から出て行かれた。指導者がいなくなってきた、その時点で活動ができなくなる。次の指導者が育ってないという事が一つの大きな問題としてある。今はお花、お茶は盛んだけど、40代50代はほとんどやっていない。やっている人も70歳代80歳代中心。それは戦後の高度経済成長で女性は結婚とともに家庭に入り、男性は終身雇用制で就職すれば定年まで企業にいられる状況。毎年給料は上がる、それいけどんどの中で、企業も応援してくれた。今は全く社会の状況が変わっている中で、企業もゆとりがないから、極めて個人的な活動に志向して、部分的には応援もあるが、そういうことにおいて文化協会は全国ほとんど同じ状況だと思う。そういう中で教育委員会が働き方改革で中学校の部活動の地域移行という問題が起きてきて、現実には指導者がいない。実践団体の中でそういう状況にあって、それをどう教えていくかということ、指導者が減ってきてい

る。社会人の組織自体が下降線の一途を辿ってきている。今から10年20年先が見据えられない。そういう中で移行の問題。同じような分野、同じように維持するのは無理だから、今の環境の中で変わった形が求められているのだろうと思います。いろんな分野での部活で残すことは不可能です。学校の現場の大変さは痛感しているので、学校に求められない。文科省が全てご破算にして、ゼロから学校教育を考えてくれれば出来るけれど、いろんな事が次から次へと起こってきて、現場の先生は大変だと思う。今の小学生はほとんど曜日ごとに習い事をやっている。周南少年少女合唱団も増やそうと思っけていても、毎日が忙しくて、とても他の活動を出来る状況にない。毎日のように習い事をしているから。

本当は小学生は、もう少しゆとりがあつて、好きなことをやって、残っている時間で、また色々なことを経験するというのがいいんじゃないかと、個人的には思う。そういう状況の中で活動を続けていくことの難しさを非常に感じている。いろんな現場の人達もそうだろう。その中で周南でこういったプランを興すときに、違う新しい像を求めて、どういう形の可能性がこれから考えられるか、それまでの過去の例はご破算にして、これからの時代どういった形、仕組みができるのか、子どもにもいろんなことを経験して欲しい。経験して自分の人生の中で、喜びとして、苦しいこともあるが、人生の中でいいなと思えるような活動が、いろんな形で提供できればいいなと。今はそういう段階に入っている。新しいスタイルが求められている時代じゃないかと思う。

(会長)

今のみなさんのご意見、全員出していただいたご意見の中で、若干不足していた部分としては、どちらかというと、どう伝えていくか、どう発信していくかに集中していたかと思うが、今、現場目線で話をすると、伝える人がそもそも断絶をしそうだという話ですよね。今回の論点の内、どのような取り組みが必要かということで、伝えていく指導者、伝達者、伝道者がそもそも途絶えてしまう。途絶えてしまったら、どんなに知りたくても伝えることができないので、その危機感を持った方がよいのかなと思う。部活の全面移行はリミットが来ているんですよね。一年後、来るんですよね。文化芸術の中に音楽とかコンピューターが入っているんですよね。プログラミングやピアノをやっていたらまだいい

が、ここにはスポーツが入っていない。スイミング、サッカー、野球をやっても、我々にとっては…。できれば相乗効果があればいいが、少年少女合唱団を習い事の一つとして位置付けて欲しいと切に願うのですが、伝える人、教育者が不足しているというのは、真剣に市として考えなければならないと、聞いていました。

論点2に移らせていただきます。

(委員)

文化会館も美博もいい施設であるが、一体となって街づくりの要素になっているという事をもう少し協調するといいのかなと思います。Eテレを日曜日に観るが、博物館や美術館が出ますよね。番組を観ていると、こういう地域、いいなと思います。なかなかそういう風には周南が全体的な雰囲気としてなっていない。そういう魅力が、周南らしさとしてあったらいいのかなと思う。

(委員)

おっしゃる通りです。14万都市で文化会館、美術博物館を持っていて、なおかつ自主事業で積極的な事業を展開している。学校の方でも、小中学生は無料だから、機会があれば、来ていただいて鑑賞教育もしている。それが、していることを伝える人、本当は評論家がいるといいんだと思う。客観的に図れて社会に発信できるとよい。それが当市は少ない。当事者が言うと手前味噌になる。14万都市で、あれだけの劇場を持ち、アーティストが来てくれて、広島飛ばして、福岡までがあって、周南だけがあるという事は多い。それがいかにすごいことか伝える人がいない。客観的に把握して発信できる人がいない。本当は地元の記者が地元紙へ地元目線で評論してくださるとよい。広報も広報らしさというか、さすが周南の広報は違うねと、行政としては実践団体はこういうことをやっている、伝統芸能はこういう形で写真やスケッチが登場してくるなど、紙面から溢れて躍動する広報誌になってくる。それも大きな役割だと思う。そういうことで、やっていることを広く紹介する、やっている人も自らが伝える、興味がある人、仲間を一人連れてくる。そしたら、100人が200人になり、200人が400人になる。これは非常に難しい。これはこの街で出来ているから、それをちゃんと紹介すること。それと可能性はもっとあるから、可能性をますます追求すべきだ

と思う。新幹線も停まるし、高速のインターも東、西と二つ持っている。街の環境は素晴らしいし、徳山駅を降りたら、御幸通、岐山通素晴らしい。60万都市のよう。昔、谷村新司が降り立った時に、この街は神戸に似ている。おしゃれな街で洗練されている。よそから来た人は比較が出来るからよい。街の魅力も再発見しながら、お互いの連携、お互いのことを支えあって広げていく活動が大切になっていく気がします。

(会長)

私の意見は高菅委員と近いところがある。

(委員)

若い世代への発信が大事だと思うので、ファミリー、子ども向けのプログラムを家族、親御さんを巻き込んで定期的の実施できれば、文化芸術を身近なものとしてとらえてもらえるんじゃないかと思いました。

(会長)

私は子どもが三人いて、放課後は忙しいが、夏休み、春休み、冬休みは子どもが家にいる。私は家で研究していますので、そういうときに、群馬県立博物館とか兜をつくってみようとか、夏休みの自由研究で3時間対応してあげますという、素晴らしいご提案をいただけるとありがたい。どちらにも実利があるような、結果はどうであれ、文化に触れる機会をつくってあげるという、それが夏休みの自由研究であったり、電気代が高騰している中で、涼しい中で勉強できるというのは、メリットにもなるので、そういったことも考えながら来てもらうというか、来させてしまうというアイデアがあってもいいのかなと思う。

(委員)

この間、ある雑誌を読んでいたら、かたぶちすなおというこの世界の片隅にという映画の監督が映画やドラマを早送りしない若者を創るにはどうしたらよいと思いますかという質問に答えられているのがとても興味深くて、何とおっしゃたかという、観る教育には限界がある。そういう若者、子ども達に何百本の映画、ドラマをみせても、永遠にストーリーだけを追い求めていて、一つ一つの絵の面白さ、構図の面白さを分からないから早送りをするのであって、構図の面白さはストーリーと連携しているのに、分からない、観ようもしない。そのよう

な子どもたちにどうやって興味を持たせるかというのは、つくらせるのが一番だと。実際映画をつくる、ドラマをつくる、絵を描かせる、経験させる、そしたらその裏側にある面白さが分かれば、早送りなんかするわけがない。観せる教育には限界がきています。これからはつくらせる教育をいかに小中学生にさせていくかが全てだと思います。という監督のインタビューにとっても感銘を受けた。

施設を活かして、障害を持つ方が楽しめる文化芸術の提供の場、小中学生を対象としたバックステージの見学会、文化会館の音響、照明の技術講習など、今の周南市の施設や人材を使って、体験をしてもらう場は夏休みなどにできそうな気がしました。

(委員)

今のような話を市の立場で総合プロデュースしてもらおうとよい。施設だけでやるのも限界がある。実践団体として知らせていくが、実践団体だけでやるのも限界がある。市が集約する所として、発信したり、プロデュースしてアレンジしていく。いろんな機関と連携していく。情報を共有しながら。そして初めて機能します。より広がっていくという感じはしている。地域でいろんなことをやっている。夏休みの陶芸教室は菊川、横浜の市民センターで取り組みをしているが、ご存じない。私はいろいろな知り合いがいるから情報が入ってくるが、聞いたときに、え、そんなのあるのということが多々ある。

(委員)

広報に掲載してある。

(委員)

文化振興課で1ページを持ち、総合的にアレンジされれば広がる。チャンスはある。

東京芸大の教授が、助教授の時に美博でワークショップをやって、大津島でキャンプがあって、芸大の学生を連れてきてすごく賑わった。毎年恒例になったらいいなと思い、市が300万円の予算を付けてくれ、そうすれば毎年芸大の学生のイベントになって脚光をあびるからと。予算が付かなかったから、その年限りになった。そういう話はたくさんある。今は松本で小澤征爾の塾が始まっている。小澤征爾は最初奈良県でやったが、奈良県は全く関心を示さなかった。それ

を聞いた長野県松本市が世界の注目を浴びる。そういうきっかけはたくさんある。そういう時に電波の受信機が磨かれているか、そういう時に行政と関係する人達がタグを組めば、必ず街がいろんな形で甦ってくる。それをきっかけにして大きく飛躍していく。チャンスはいろんなところにある。

(委員)

行政の補助は決まりがあったりする。映画祭の補助も7年はしてくださったが、それ以降は規約がないからと行政の補助がなくなって、苦しくなった。そういうことも、前例にとらわれず、文化芸術の意義を考えながら、一つ一つの補助や支援を考えていただきたい。

(会長)

どう発信していくかは、例えば小学校に情報をどう認知させるかは、校長会に許可をとって、配布物に関しては、ルールがあり、手続きは非常に多い。

(委員)

いまだに紙に頼っているのはどうかと思う。今の時代こういうのでできないかと思う。

(会長)

タブレットは持っています。

(委員)

世代間のギャップはある。ホームページやSNS時代というか、文化協会はほとんど対応できない。そもそもSNSを見ない。70代や80代だから。

(委員)

文化芸術はいろいろなジャンルがあるんだと、事前に頂いた資料をみていて。いろいろなジャンルの人が施設を使うと考えた中で1から7まで書いてあるが、いろいろな役割や機能で使えるのではないかな。さっきから出ているが、文化施設がどういったことで使えるのか、料金がどうなのか、いつが空いているのかというのは、なかなか情報が出てないのではないかなという気がしていて、最近では市役所の施設でシビック交流センターがネットでみられるが、文化施設はネットでみられるのか、紙媒体よりはネットでみられる方が楽ではある。意外に面倒なので、電話はかけない。こういう場があって使えるんだよという、誰もがアクセ

スしやすいような情報提供の場があればいいんじゃないかと思いました。場所は文化会館もあり、美術館もあり、たくさんある中で自由に使えるんだよというのが、分かりやすく伝わればいいんじゃないかと思いました。

(会長)

時代に合わせた場所の使い方というか、昨日聞いた話だが、山崎八幡宮がコスプレイヤーの写真撮影場になっているというのは、無許可ですか。県外の人のお楽しみ方が我々の想像を超えてくることがあるので、情報発信もそうですけど、こういう風に使えるんだよという提案ですか。他県の方だが、文化財に泊まれないかという話を進めている。インバウンドに期待をして、海外の人に発信している。文化財だからというだけでなく、柔軟に対応できるのが重要。

フィルムコミッションの話はもう少しあってもよい、百円の恋と回天もありますし。

(委員)

百円の恋は周南観光コンベンション協会にフィルムコミッションができたということで、相談をしたが、ほとんど機能していなくて、係の人と私の二人で集めた。なかなか組織として、周南市の場合は周南観光コンベンション協会の方にフィルムコミッションの事務局があったので難しかった。本来は行政に事務局があったり、下松市の場合は下松商業開発という第三セクターの会社に事務局がある。

なかなか行政との連携がうまくいかなかった。出口のない海の時もそうで、あ那时候、周南地域で300人集めたが、ほぼ私一人でほんとに大変だった。あ那时候も行政は協力してくれなかった。当時はしょうがないにしろ、これからはそういう仕組みを作っていくべきではないか。

(会長)

さきほど、委員がおっしゃったように、何がきっかけになるかわからない。例えば自分の推しが来たとか、映画に取り上げられたとか、そういう事でも違ってくる。そういう点でいうと、周南市という名称はインパクトが弱いと言われるところにつながっていくのかなと思う。固定観念みたいなものが、抜けるといいのかなと聞いていて思う。

(委員)

活動できる場所とか、活動団体がそれぞれの場所で普段やっているの、場所ごとに分断している。交流したり、施設の特徴を一覧できたらよいのかなと思う。

文化会館だと、お客様がピアノを弾いて練習したいのだけれど、どういう場所がありますかという問い合わせがある。それぞれの施設が何を持っているかわからないので、ホームページで調べたり、聞いたりして、自分たちでメモをつくっているが、最新のお互いのこういうものができますよとかが、施設ごとで分かったら、こっちの施設では今日は貸せないが、こっちに行ったらこういうことができますよとか、合唱の練習をしている団体さんがこっちであるから、興味があれば行ってみたらいかがですかとかができて、もっと便利になるんじゃないかと思う。

(会長)

施設の横のつながりですね。意外にありそうでないというか。文化施設や所蔵資料とかもですね。

(委員)

今、たまたま公民館の大きいところにバイトで出ているが、いろんな方が来られて、下は幼稚園、上は80歳代の方が来られて、みなさん一生懸命されている感じで、不満があるように見えないが、かといってずっと続くかなと言えば、厳しそうな団体がたくさんあって、一年を通すと団体がなくなるという状況がある。施設はちゃんとあるし、空いてる時間もあるというのが現状です。

(会長)

施設はあるが、まだまだ利用されていないという現状を感じられているということですね。

(委員)

設備について不満はないと思います。

(委員)

今度、市長公舎が借りられるという話をきいて、写真を撮ったりする。最近は推し活がすごい。職場の人もそうで、だれだれが江ノ島で写真を撮ってたので、

そこまで行ったとか。エネルギッシュな人たちがいる。映画があれば聖地巡礼でいろんなことをする。いろんな楽しみ方があって、好きなものへはとことんついていくみたいな人がたくさんいらっしゃるの、そういうのは面白いのかなと思いました。

(会長)

本学の長澤先生も下松で映画を撮ったが、本学があまりバックアップできなかった。映画が撮られたから行くのはもちろんだが、今回の会議でも施設というポテンシャルもあるし、いろんな観光資源もある。児玉源太郎という偉大な人物がいるのだけれど、発信する場所が図書館以外にない。大津島というのは、かなりな観光資源ではあるが、フェリーで行かなければいけない。あれがかなりハードルが高いと学生から言われる。ひとたび行くとなかなか帰ってこられない。天候が悪化したら本当に帰ってこられない。長崎県の軍艦島は参考例ですが、軍艦島に行かなくても体験できる施設をかなり立派に造っているので、なかなか真似するのは無理なのですが、いろいろなスペースを活用しながら、いろんな施設で使うというのもひとつだし、ソフトを使って提供する。それで文化芸術という情報を体験できるようところがあるといいのかなと。そういったときに駅の周辺施設、駅のホームに使われていないところがあるので、JRさんに使わせてもらえないとか、CCCさんと共有して駅前の交流施設に周南市の魅力を発信できる場所をつくっていければよいのではないかと思います。

児玉源太郎顕彰会、まど・みちおもそうだが、いかに伝えていくか。本学でも地域文化講座という形で、文化人のみなさんの話をお伝えしている。私が一番危惧しているのは、今の講師の方がいなくなったら、次の方を紹介していただけるのかということ。施設の整備、何が必要か役割、機能が論点のひとつではあるが、そこに誘導するため、例えば、回天記念館に行くためには徳山駅の近くに回天に関する情報コーナーがあって、深く学びたければ大津島に行きましょうとか、まど・みちおに関しては、図書館、美術博物館にこういう展示がありますと、周りに知らせるようなものが、あればよいのかなとみなさんの話を聞いて思いました。

何かあれば、事務局に連絡することも可能でしょうか。

(事務局)

今日も踏まえてご意見を随時頂くこともしたいと思います。

(会長)

私は周南に詳しいわけではないし、今日みなさんの話をお聞きして、勉強になったこともある。現場のみなさんの話を聞き、意識を持って過ごしていかなければいけないと感じました。それは全て文化振興、文化芸術振興につながっていくと思いますので、それが分かるようなプランにできればと思っております。以上をもちまして議事を終了します。

(事務局)

会長のリードによりまして、いろいろな立場の皆さまのいろいろな意見を言いながら、同じ方向に向かっていくことを感じることができました。

これから周南市の文化の背骨みたいなものを作り上げていきたいと思います。

3. 閉会